

口頭発表「命の教育としての学校動物飼育教育の推進」

山本千恵子

1 はじめに

埼玉県久喜市は、人口約7万4千人、小学校10校、中学校4校の田園文化都市である。

平成15年度から学校獣医師制度を立ち上げ、学校動物飼育教育について、市全体で取り組んできた。親子ボランティアも広がりを見せ、動物好きの子供が育ってきているのは、ひとえに市内に在住する6人の獣医師の理解と協力のおかげである。4年間を振り返り、その成果と課題について述べる。



2 学校動物飼育体制の確立

(1) 学校動物飼育の問題点

平成14年の秋に、ある学校の飼育活動にボランティアとして関わっていた人たちから次のような指摘を受けた。

- ・避妊していないためにウサギが27匹もいる学校がある。飼育舎の広さに対してこれでは増えすぎである。けんかやトラブルも多い。
- ・古いえさが置かれている。また、休日に水もえさも無いときがある。
- ・床に傾斜がつけてないため、水がたまりやすく、ウサギの足裏に傷ができやすい。
- ・雨が入りやすく、水はけも悪い。
- ・エサやりや飼育動物の扱い方等、教員の認識が不足している。
- ・飼育舎にふさわしくない動物(軍鶏、アヒル、孔雀等)を飼っている。

(2) 教育委員会の取組

学校によっては、動物飼育の状況が決してよい環境ではないことが分かり、動物飼育の問題点を認識した。

そこで、次の方針の下に取組を進めることとした。

<改善の方針>

- ・飼育舎の環境整備
- ・飼育方法の改善
- ・動物飼育に関する教職員の意識の改善
- ・保護者・地域への啓発

<実際の取組>

○学校動物飼育研修会の発足と研修

教職員、獣医師、ボランティア等対象
講師：中川美穂子氏（日本小動物獣医師会学校飼育動物対策委員会副委員長）

平成14年・15年・16年・17年・18年と毎年実施

○獣医師との連携の確立

獣医師6人と契約を結び、獣医師との連携体制を構築。各学校毎に担当獣医師を決める。

No	獣医師名	学 校 名
1	S・S	本町小学校 久喜北小学校
2	T・M	太田小学校 久喜北中学校 太東中学校
3	T・T	青毛小学校 久喜東小学校
4	T・O	久喜小学校 江面第一小学校
5	H・S	江面第二小学校 清久小学校
6	S・S	青葉小学校 久喜東中学校 久喜南中学校

○獣医師・教育委員会による学校巡回訪問指導の実施

年2回 5～6月と12月

管理職、飼育担当者、飼育担当児童生徒の参加

○獣医師のみによる学校訪問の実施

年2回 11月 2月

○獣医師による日常の学校支援

診断・治療、飼育相談、予防措置等

3 飼育舎の改善

・A小学校における飼育舎の改善

飼育舎の床全面がコンクリートになっており、ウサギが足を休める場がなかった。飼育舎



の中に池があり、糞や尿が入り込み不潔になりやすいこと、湿気の原因となることから、飼育舎の中の池を砂場に直し、足を休める場所を作った。

さらに、個別の生活用ゲージを設け、ウサギたちが生活しやすいようにした。その結果、足をケガするウサギが少なくなった。

・B小学校における飼育舎の改善

床が低く、水がたまりやすかったので、コンクリートを入れ直し、勾配をつけて排水や掃除をしやすくした。その結果、子供たちが掃除をしやすくなり、清潔な環境を維持できるようになった。

4 学校動物飼育に関する研修の実施

平成14年度から5回にわたって、教職員やボランティア、PTA役員等を対象に、中川先生による研修会を実施した。その際、必ず管理職も参加するようにした。ビデオを使った分かりやすい講演は、動物飼育に対する考え方を大きく変えるものとなった。

『動物飼育は、命を大切に、人を思いやる心を養う、動物への興味関心を高める、愛する心の育成を図る等の効果があるが、これらは、子どもが動物をかわいいと思ってこそ得られる効果である』との講演は参加者全員の心に響いてくるものであった。

学校動物飼育体制に着手する前までは、学校で動物を飼うということについての意義を真正面からじっくり考えることが少なかったように思える。それまでは、生活科や理科の学習対象としての動物飼育としか考えていなかった。そして、校舎から離れた飼育舎で飼育されている動物を、飼育委員会の児童生徒・担当教員が世話をしているというのが多くの学校の実態であった。

そのうえ、教員の多くも、飼育委員会の担当になると大変だ、動物好きな人が担当すればよい等の考えを持っていた。

しかし、中川先生の講演会に参加したり、獣医師の先生方と話し合ったりするうちに、学校動物飼育教育は、生命尊重の心の育成という大変重要な教育の中核を担うものになるという考えを強くしていった。

毎年、研修会を行う中で、徐々にその意義が浸透していったように思える。



5 学校動物飼育指針の作成とその啓発

学校動物飼育に対する関わりを深めるうちに、「生き物から学ぶ」「生き物について学ぶ」「生き物のために学ぶ」という視点に基づいた学校動物飼育活動を推進する必要性を認識した。そこで、動物飼育や植物栽培の体験活動を通して、

- ・生命尊重の心、思いやりの心、情操を育む
- ・責任感、粘り強さ、協調性を育む
- ・多くの人に支えられていることを学ぶことをねらいにすえ、学校動物飼育を市の教育行政重点施策に位置づけた。さらに、学校動物飼育指針を作成し、各学校に配布し、教員一人一人の意識の啓発を図った。

<久喜市学校動物飼育の指針>

学校動物飼育の指針

久喜市教育委員会学校教育課

1 動物飼育に当たって

学校における望ましい動物飼育を行うにあたっては、必要かつ十分な条件を整えることが大切である。

動物飼育のねらいの実現には、まず学校で動物を飼育する意義や目的について、教科や特別活動等における位置づけを明確にし、飼育に対する考え方をしっかり持たなければならない。

次に、それを保護者や学校の近隣及び地域の人々に説明し、理解や支援を得るようにする。飼育活動にこれらの人々の意見を反映させることも考えられる。

動物飼育にあたっては、何よりもこうした取り組みが必要である。そして、これを毎年確認し合い、常に新たな気持ちで飼育を続けることが大切である。

2 動物飼育のねらい

- (1)児童生徒に、動物の飼育体験を通して、自然のしくみを知り、命の尊さや思いやりの心を育む。
- (2)友達と協力して動物の世話を継続して行うことによって、責任感や協調性を育む。
- (3)動物たちと直接触れ合う体験を通して、豊かな心を育む。
- (4)地域の方や獣医師との連携を通して、多くの人に支えられていることを学ぶ。

6 獣医師による日常の学校支援と飼育方法の改善

○学校の早い対応

それまでは獣医師に診察をお願いすることに予算面などで躊躇しがちであった学校が、動物に異変があるとすぐに相談できる体制を築くことができた。獣医師も学校の要請に迅速に対応し、入院の措置をしたり、投薬の措置をした結果、動物の病気や怪我が少なくなってきた。また、ウサギのオスに去勢手術を行い、適正な飼育数を維持することができた。

○飼育方法の改善

獣医師からウサギが大変神経質な動物であること、突発的な動きで背骨が折れる場合があるので、抱き方には十分気をつけること、量や回数等えさの与え方、習性等、またニワトリは鶏冠や足の色を注意深く観察すること等の話を伺い、それまで知らなかった知識を得ることができ、教職員や児童生徒の飼育方法の改善を図ることができた。

さらに、飼育していた動物が死んだ場合の処置の仕方も指導いただき、土に埋める場合は深く、石灰と一緒に埋めるとよいなど詳しく指導をいただき、単に埋めればよいと安易に考えていた学校にとって、適切な埋葬の仕方を学ぶ良い機会となった。

○飼育舎の環境の整備

飼育舎の環境整備について、獣医師から専門的なアドバイスを受けることができたため、動物にとって快適な環境になり、のびのびと過ごす動物が増えた。



○感染症への対応

鳥インフルエンザの感染が報道されたときは、獣医師からの的確な指示をいち早く受けることができ、いたずらに恐れることなく、冷静な対応ができた。

児童生徒や教職員がウイルスを飼育舎に持ち込まないことが重要という指示をいただき、ともすれば「人間がうつされるから心配」という

考え方をしていた教職員にとって、大変参考になった。

また、校庭や学校の近くにカラスの死骸があった場合にも、獣医師に連絡し、家畜保健所にて鳥インフルエンザのウイルスを調べてもらうなど、きめ細かい対応ができるようになった。

○飼育方法の上達

学校巡回訪問指導において、飼育舎の中の動物だけでなく、モルモットや水槽で飼っている魚、インコ、十姉妹などの小動物の飼育方法についても、獣医師が指導をしているため、子供達も観察の仕方や飼育の仕方が分かり、わずかな変化にも気づくようになった。

その結果、動物に対して一層の愛情を持って接することができるようになり、個々のウサギに名前をつけるようにまでなった。また、動物の死に接すると、多くの児童が涙を流し、悲しみの気持ちを表すなど、あらためて命の大切さを感じ取っているようであった。

7 学校の取組

○全校体制の確立

各学校が、管理職を始めとして、全教職員で学校動物飼育に関わる体制を確立した。

特に休日や長期休業日における動物の飼育については、全教職員で分担して取組むようになった。

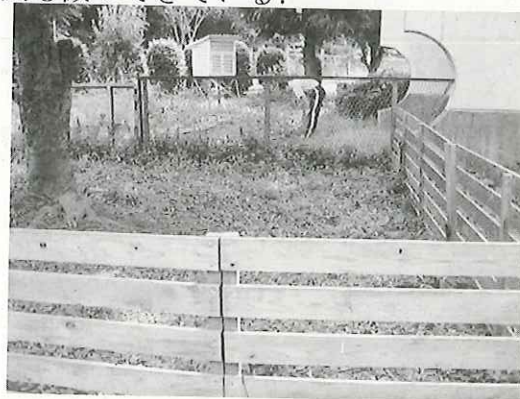
○獣医師によるゲストティーチャー

小学校の道徳の学習に獣医師を招き、動物との関わりを通した命の大切さについて話をしていただいた。子供たちの聞く姿は真剣そのものであった。

○飼育舎の環境整備

教職員が長期休業日を活用して、ウサギが走り回れるように運動場やウサギが眠る飼育箱を作ったり、冬の寒さを防ぐために飼育舎にビニールシートを貼るなど工夫改善を重ね、動物にとって快適な環境を整えている。

その結果、動物ものびのび過ごすことができるようになり、毛並みも美しくなった。また、病気も減ってきている。





○親子ボランティア・地域ボランティアとの連携

土曜日・日曜日及び長期休業日に、親子でそろって動物の世話をしてもらおうと、親子ボランティアの制度を取り入れる学校も3校に広がってきている。

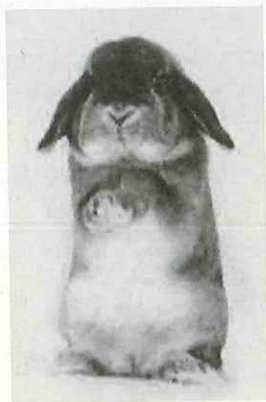
休日になると、ウサギやニワトリが心配という児童が増えてきており、動物飼育のためのボランティア活動が根付いてきた。

○子どもにとってオアシスの場

友達が少ない子が、小鳥小屋にいて小鳥を相手に話しかけていたり、友達とけんかした時、飼育小屋を訪れ、うさぎを抱く事によって気持ちを静めたりと、子ども達の情緒の安定の場にもなっている。

8 成果

- ・子どもたちの観察力が高まってきた。
- ・環境が改善されることによって、飼育動物の病気や怪我也少なくなり、毛並みもよくなってきた。
- ・教員や子ども達の飼育方法が上達してきた。
- ・飼育動物に対する子ども達の愛情の深まりが見られるようになった。



- ・親子ボランティアが少しずつ増えてきている。保護者の動物飼育に対する認識も徐々に深まってきた。
- ・やさしさや生命を尊重する意識の広がりが見られる。

9 課題

動物をめぐる環境整備は整いつつあるが、以下の点について改善の余地がある。

- ・保護者やボランティアを含めた休業日や長期休業日の飼育体制の確立
- ・生命尊重を基軸とした教育計画の一層の充実
- ・飼育動物の世代交代

10 おわりに

獣医師と連携した学校動物飼育体制がスタートして4年が経つ。学校動物飼育教育の意義も含めて、動物飼育について学ぶところが多大であった。動物飼育の方法だけでなく、動物の見方を学ぶことは、子ども一人一人をあたたく見つめることにもつながる。これも、中川先生の親身なご指導、6人の獣医師による献身的なご協力があったからこそと大変感謝している。専門家の支援がいかに教育に必要なかを痛感した日々であった。

本市では、不登校の児童生徒や発達障害等特別の教育的支援を必要とする子どもたちへ、専門の医師による学校巡回訪問指導も立ち上げ、きめ細かい指導に取り組んでいる。

専門家による支援をいただくことによって、学校の教職員の活動がより焦点化され、効果が上がることを実感している。

今後も一層の充実を期し、努力していきたい。

(久喜市教育委員会学校教育課指導係長)